文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動））独立行政法人日本芸術文化振興会

Doors open10:00

Kyoto Kanze Regular Performances 10 Sun Jan. 2027 11:00 a.m.-4:30 p.m.

京都観世会館 Kyoto Kanze Noh Theater

京都観世会一月例会

令和9年1月10日（日） 午前11時 開演（午前10時開場）

〈能〉	〈能〉	〈狂言〉	〈能〉	〈能〉
Okina	Arashiyama	Kobugaki	Futarishizuka	Iwafune
翁	嵐山	昆布柿	二人静	岩船
片山九郎右衛門	古橋正邦（白頭）	茂山千五郎	観世清和（立出之一声）	谷弘之助



主催 公益社団法人 京都観世会

TICKETS 12/1 10:00発売

一般前売指定席券（1階） Advance reserved seat (1st floor)	¥9,000
一般前売自由席券 Advance non-reserved seat	¥7,000
一般当日券（自由席） Same-day (Non-reserved seat)	¥7,500
学生券（2階自由席） Student (2nd floor)	¥3,000

※通信講座受講生、放送大学、老人大学は一般料金です。

WEB予約で座席指定できます。
電子チケット チケットれすQ も選択できます。

チケット販売

お問合せ・お申込み
京都観世会館
Tel：075-771-6114
https://www.kyoto-kanze.jp
〒606-8344
京都市左京区岡崎円勝寺町 44
（東山仁王門東入）

京都観世会館HP

Noh Play Theater
Kyoto Kanze Kaikan

会場 京都観世会館



地下鉄東西線「東山駅」①番出口から徒歩約5分
京都市バス「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車 徒歩約3分
「東山仁王門」下車徒歩約5分
東隣に有料駐車場（約20台）がございます。

日本語 Map　English Map

京都観世会一月例会

（能）

翁
面箱 茂山竜正
三番三 茂山茂
千歳 寺澤拓海
片山九郎右衛門

嵐山
姥 宮川卓也
子守明神 大江広祐
勝手明神 浅井風矢
蔵王権現 尉 古橋正邦
従者 佐々木秀
大鼓 石井景之
勅使 福王知登
胴脇 成田達志
白頭 従者 廣谷和夫
頭取 曽和鼓堂
太鼓 前川光長
笛 杉信太朗
間 末社の神 鈴木実
手先 古田知英

（狂言）

昆布柿
丹波国の百姓 茂山千五郎
淡路国の百姓 お奏者 茂山逸平
島田洋海

――休憩二十分――

（二時過頃）

（能）

二人静
菜摘女 里女 静御前 観世清和
勝手宮神主 立出之一声 福王茂十郎
大鼓 小鼓 河村大
小鼓 林吉兵衛
笛 杉市太郎

――休憩十五分――

（四時過頃）

（能）

岩船
龍神 谷弘之助
従臣 原陸
勅使 原大
大鼓 井林久登
小鼓 林大和
太鼓 井上敬介
笛 森田保美
従臣 有松遼一

（仕舞）

屋島 大江信行
草子洗小町 杉浦豊彦
鞍馬天狗 浦田保親

（終了予定 四時半頃）

【お知らせ】
今後の状況の変化により、当日券販売の有無や催し物の内容等が変更となる場合がございます。あらかじめご了承ください。
「字幕解説サービス」専用端末は千円（税込）にて貸出いたします。

後見・地謡

後見 青木真由人 片山伸吾
後見 味方團 味方玄
後見 青木道喜 地謡 樹下千慧
地謡 宮本茂樹 浦田保浩
松野浩行 浦田保親
狂言後見 茂山千五郎 山下守之

後見 林喜右衛門 地謡 河村浩太郎 浦部幸裕
後見 杉浦豊彦 地謡 大江泰正 吉浪壽晃
河村和貴 井上嘉介
橋本忠樹 分林道治
後見 茂山虎真

〃 片山峻佑
地謡 橋本擴三郎 橋本雅夫
越賀隆之

後見 大江広祐 橋本充基 田茂井廣道
後見 河村晴久 地謡 片山峻佑 河村晴道
地謡 井上裕之真 大江信行
吉田篤史 橋本光史

解説

翁

数ある曲の中で別格とされる『翁』は、能が芸能として整う以前の祖型であり、新年を言祝ぐに最も相応しい神事である。舞台に第一に登場するのは神体の翁面を運ぶ面箱持、それから直面の翁大夫、千歳、三番三、以下揃役が続く。〈翁ワタリ〉翁大夫は正先に出て深々と一礼し、笛座前に座し、面箱が前に置かれると「とうとうたらり……」と謡い出す。露払役の千歳が颯爽とした「千歳ノ舞」を舞う間に白式尉の面を着けた翁大夫は「坐して居たれども」と謡い、大小前に立って「天拝」「地拝」をし、祝祷の謡の後に荘重な「翁ノ舞」を舞い始める。三節の各終りに「天・地・人」の足拍子を踏み、舞台を一巡すると再び「萬歳楽」と天拝して舞い納める。面を外して面箱に置き、一礼して大夫は千歳と共に幕入りする。〈翁カエリ〉

続いて狂言方の三番三が走り出て、まず直面で力強い「揉ノ段」を舞う。その後、後見座で黒式尉の面を着けると、面箱持との問答を経て鈴を受け取り、「鈴ノ段」になる。呪術的な舞は最高潮に達したところで終止符が打たれ、舞台は元の張り詰めた静寂に包まれる。面を外した三番三と面箱持、後見、脇鼓が退場し、地謡が後座から地謡座へ移動し、次の脇能が始まる。

嵐山 白頭

都の西、嵯峨・嵐山の桜は、桜の名所・吉野山から移した千本の桜であるという。吉野は見に行くのにはあまりに遠いからである。

当今の臣下が勅命を受け、嵐山の桜を見に行く。すると嗣と姥がやってきて、箒で桜の木陰を清める。老夫婦は花守であり、桜の木は神木であるから尊崇するのだと教える。勅使が「なぜ神木なのか」と尋ねると、老夫婦は「有名な吉野の千本を移し植えたからであり、時々は子（木）守、勝手の神々がこの桜に来現されるのです」と答える。さらに勅使がなぜ「嵐」という、花が眠る名の土地を名所に定めたのかと、たとえ「嵐の山」であっても花は散らず、風にうち勝って木を守る、神の力をお示しになるのだ、と説明し、その中で自分たちは子守・勝手の夫婦の神であると明かす。夕暮れになり、神の化身「老夫婦」は雲に乗って姿を消す。〈中入〉

末社の神が現れ勅使をなぐさめ、続いて勝手・女体）子守（男体）の二神が今度は神の姿で現れ舞を舞う。やがて瑞雲たなびくと金色の光とともに蔵王権現が現れ、御代を祝福するのであった。

「白頭」の小書により、後シテの扮装が常の赤頭から白頭になり、子守・勝手と同体異名を表す型も入り、蔵王権現のスケールの大きさを強調する。桜の作り物も更に華やかになる。

二人静 立出之一声

勝手明神の神職に命じられて、菜摘女が若菜を摘んでいると、一人の女が現れて、社家の人に自分の供養のための写経をしてくれるよう伝える。菜摘女が名を尋ねると、「もし人が疑えば、あなたにのりうつって答えよう」と言い、消え失せる。〈中入〉

菜摘女が神職に報告すると、突然霊がのりうつり、静御前と名のる。霊は菜摘女の口を借りて宝蔵に衣のあることを告げ、その衣を身につけて舞を舞う。すると全く同装束の静御前の霊が現れ、影のように菜摘女に寄り添い、義経の吉野山での逃避行、また頼朝の前に召されたことを語り舞い、やがて回向を頼んで消え失せる。

菜摘女が神職に報告する途中で、静御前の霊が菜摘女にのりうつり、そして静御前の霊も現れる。菜摘女と、菜摘女に影のように寄り添った静御前の霊。同装束の二人が舞台上に登場することがこの能の主眼の一つとなる。

「立出之一声」の小書が付くと、「クセ」（序之舞）を菜摘女が一人で舞う演出もある。その場合、静御前は床几にかかる。さて、この度はどのような演出となるのだろう。楽しみにご覧いただきたい。

岩船

泰平の世に、住吉の浦で高麗、唐土の宝を買い取れとの勅命を受けた臣下が住吉に着くと、天の岩船を守護した龍神が現れ、宝を満載した岩船を岸に着け、金銀珠玉を運び上げて、御代を祝福する。

「万葉集」巻三の角麿の歌「ひさかたの天の探女が石船の泊てし高津は浅せにけるかも」などの話がもとになっている。現在の観世流では半能形式の祝言専用曲となっているが、他流では前後二場のかたちで演じられる。童子が勅使に宝珠を捧げる内容であるが、原形では老人と女が出たようである。すなわち龍神と天探女の化身で、後半は《竹生島》のように龍神と天女が現れた。祝言性の満ちた曲である。

お客様へお願い

◆都合により出演者に変更がある場合がございますので、あらかじめご了承ください。
◆《翁》が始まりましたら、一階見所へのお出入りをご遠慮いただきます。
◆許可なき写真撮影・録音・録画はお断りいたします。
◆上演中は、携帯電話などの音や光を発する機器の電源はお切りください。
◆見所（客席）でのご飲食はご遠慮ください。
◆東隣に有料駐車場がございます。満車の際は岡崎公園市営地下駐車場等をご利用ください。

【表紙写真】
《嵐山》片山九郎右衛門
金の星渡辺写真場 撮影

次回予告

京都観世会二月例会
令和9年2月28日（日）
午前11時開演

（能）絵馬 味方團
（狂言）惣八 茂山あきら
（能）千手 河村晴久
郢曲之舞
（能）善知鳥 宮本茂樹